

## 座談会「グローバル化の進展と日本語教育のあり方」

(日本語教育新聞 2004年1月1日号より)

### 【出席者】

西原 鈴子氏(東京女子大学教授)

池崎美代子氏(ビジネス日本語協会[BNA]代表)

佐々木茂寿氏(日本語教師会会長)

山田 泉氏(法政大学教授) = 紙上参加

進行・安西純子(日本語教育新聞編集長)



座談会の様子

## 国際共通語としての日本語

**安西** まず、日本語教育の現状についてどのように見ておられるか、問題提起も含めてお話を聞かせて下さい。

**池崎** 私は、ビジネスパーソンに対する日本語教育と並行して、ジャパン・リターン・プログラム実行委員会というNGOを九五年に設立し、世界各国で日本語を学ぶ若者を日本に招聘して、日本語による意見発表、日本の若者とのディスカッションを行う日本語サミットを主宰しています。

このイベントを通じて痛感させられるのは、日本の高校生の日本語力の弱さです。というより、日頃から物事を考えるという訓練ができていないので、表現すべき内容がないといった方がいいかもしれません。いずれにせよ、海外の同年代の高校生と比較すると、日本の子どもたちは自分の意見を述べる本当に発信力が弱いと思います。

日本語教育というと、一般的には外国人に対しての日本語教育を意味すると思うのですが、私は日本人に対しての日本語教育の必要性を感じています。日本人も含めて、日本語を学習している人すべてを日本語教育の対象者と考えているのですが、きょうはぜひ日本語教育についての皆さんのご意見をお聞かせいただければ幸いです。

**西原** 日本人の日本語力の弱さについては私も同じことを感じています。大学で日本語教員養成講座の最後の締めくくりとして教育実習、教壇実習を行うのですが、ここで大問題になるのが日本人学生の日本語力なのです。

国内の日本語教育ということに関しては、リンガフランカーとしての、つまり国際共通語としての日本語をどう捉えていくかが、これからの課題になるように思います。共通語としての日本語ですね。例えば先日、韓国、中国、日本の日本語教師会の代表と会議をする機会がありましたが、その場合の共通の言語は日本語です。それぞれ、相手の母国語は理解できませんから、使う言葉は日本語になります。まさに国際共通語としての日本語です。

また、今の日本には多くの外国籍の方がさまざまな形に定住しています。今後この傾向がさらに進むとすれば、共通の言語としての日本語というものを育てていかなければなり

ません。そうしなければ、これからのグローバル化に対応できないのではないのでしょうか。日本語が母国語でない方々にも、意志の疎通ができるような国際共通語としての日本語を育てていかなければいけないと思います。

**安西** 具体的にはどのような日本語なのでしょう。

**西原** 例えば、論旨をはっきり話す、語尾を濁さないなど、国際コミュニケーションの手段としての日本語を、日本人も含めて考えていかなければいけないということです。

**佐々木** 私も日本人を対象にした日本語教育の必要性を痛切に感じています。世間一般は日本語ブームということで、日本語に関するいろいろな本が出ています。私は、ブームといっても上っ面だけで、いわゆる日本語の乱れというものの修復作業ではないだろうかという気がしています。

十年ほど前から言われ始めたのでしょうか、「千円からお預かりいたします」という言い方。私には、どうもしっくりきません。日本語のよさを見直して、正しい日本語をまず日本人が話せるようにすることが先ではないかと思います。言語というのは文化の原点であり、言語を通してしか価値観は伝えられません。言葉を正しく使えるようにしていくことが日本語教育の大前提ではないのでしょうか。

**安西** 日本語教師養成講座を受けている方はどの年代が多いですか。

**佐々木** 私が日本語教師を始めた七年ほど前は若い女性が主流でした。海外に行きたいというのが主眼で、日本語を教えるというのは従だったのですが、この頃はだんだんすそ野が広がってきて、特に中高年の女性が多くなってきました。子育てから解放されて何か社会的な活動をしたいということで、国際交流も兼ねて日本語教師になりたいという方が増えてきているように思います。それと、若い男性も増えてきましたね。

**安西** 西原先生、大学での日本語教員養成課程の人気はいかがですか。

**西原** すごい人気です。二〇〇三年度から始まった日本語教育課程は二学部十学科すべての学生が履修できるシステムになっていて、七月終わりに来年度向けの説明会を開いたところ、数理学科を除く九学科から参加がありました。日本語教師になる、ならないに関わらず、課程を収めたいという人が九学科にいたわけです。それだけ人気がある。

## 言語と文化の変容

**西原** 外国語を学ぼうという時に、第二言語が第一言語以上になることはないので、そういう意味では第一言語のもつ意味は重要で、第一言語がしっかりしている人は他言語を学んでも確実に上達する。ですから、まず日本語の力を付ける必要があります。

日本語の力というのは知識だけではなくて、きちんと使えるかどうか大切です。言語能力というのは、言語学の世界ではいくつかの能力のことをいっていて、一つは、しかるべき場面でしかるべき表現ができるか、使い分けられるかという社会言語学的能力。二つ目は、もう少し場面即応的な社会文化的な能力です。特に第二言語の場合よく言われるので

すが、ストラテジー能力、自分が知っている範囲のことをきちんと使いこなして意志の疎通ができるかどうか。知識偏重ではなくて、言葉によって人間関係がつくれるかどうか。

実は日本の国語教育でも英語教育でもこの点が問題で、これまでは知識偏重でした。話ができ、人間関係をうまく構築できるようにする教育は、なおざりにされてきたと思います。そういうこともあって、日本人は世界中で話べたと思われていて、国際会議における議長の役割は、インド人を黙らせて日本人にしゃべらせることだ、という笑い話があるくらい、日本人はしゃべらないという定評があります。

大学生もそうなのですが、知識の不足以上に、問題をうまくまとめて他人にぶつけ、返ってきた反応を受け止めて、さらに返すという能力が足りないように思います。そういう力を国語教育の世界でつけていく努力を行うべきで、その意味では国語表現という科目が高校のカリキュラムに入りましたし、小中学校でも表現能力の大切さを強調するようなことが指導要領の中に入ったのはよかったです。

**池崎** 冒頭にちょっと言いましたが、表現能力以前に、日本の若者は考える力が弱いように感じます。考えないから、言いたいことがない。表現能力はもちろん大事なことなのですが、それにはまず自分でものを考えるということが前提になければなりません。日本語サミットで日本の子どもたちに接していると、ものを考える習慣がないのではないか、ものを考えたことがないのではないかという思いにとらわれてしまいます。

**西原** 言語能力というのは認知能力ですから。言語は手段にしか過ぎません。持っているものがなければ、いくら技術を持っていても、表現することはできません。

**池崎** ですから、これは日本語教育の範疇を超えた話かもしれないのですが、海外の同年代の若者と意見交換をしようにも意見がないから感想しか言えない。これはかなり深刻だと思います。ですから、まず、ものを考える習慣を小さい時からつける。

日本語サミットは、毎年「平和」というテーマを設定して議論するのですが、平和というのは犠牲や対価なしには維持できません、同じく日本語の獲得も努力なしにはできないと思います。日本人だから日本語がでできると思うのは大間違いで、小さいときから、日本語を獲得するには努力が必要なのだということを意識して教えていかないと、日本人の日本語能力は衰退していくでしょうし、ひいては日本の文化も衰えていくのではないかと心配しています。

**西原** 言語習得の臨界期というのがあって、十二歳プラスマイナス二歳ぐらいが第一言語の規範とか規則に成熟する時期で、その上に読み書きがあって、それをそしゃくしながら考えるという、物事を抽象的に考える能力と関わってきます。そここのところがきちんできていないと、日本語の質も高くないし、したがってあまり外国語もできないということになります。

先ほど日本人は国際会議でおとなしいという話をしましたが、日本の価値基準に沈黙は金というのがあります。大物は黙っている。おしゃべりは軽い。黙っていることがいいことだという文化が日本にはあります。でも、これだけグローバル化してくると、海外から

いろいろな人が日本に入ってくる社会になると、沈黙は金とばかりは言っていただけません。沈黙ではコミュニケーションができませんから。考えていることをはっきり表現して伝える必要がある。その意味で、これまでの価値判断をほどいていくということをしないと、みんな日本語を使ってきちんとやり取りをすることができないのではないかと思います。

**佐々木** 全く同感です。池崎先生が指摘されていたように、自分自身で物事を考えていないから表現できない。何も考えていないから話ができない。言語表現は価値表現そのものですから、その人が何を思って、何を考えているか、それが言葉として出てくるだけのことですから、それができないというのは持ち合わせているものがないということになる。これは、日本語教育という分野をはるかに超えて、日本の学校教育全体の問題に行き着くのではないですか。

今までの学校教育は個人の自主性を尊重するという方向でやってきましたが、行き過ぎを正すという意味で見直しを進めるのはいいことだと思います。学校教育できちんと価値判断できる素地をつくる。

もう一つ、現場で教えていますと、若い方に慣用表現的な素養が非常に低くなっているように感じます。慣用表現自体が日本人の価値表現ですので、そこがなくなっているというのは、日本の価値そのものが減っていることにならないでしょうか。

### **多様化する日本語学習者**

**安西** グローバル化による環境変化が日本語教育のあり方そのものを変えつつあるわけですが、そのあたりの議論をもう少しお願いします。

**西原** 今や、首都圏で生まれる子どもの十四人に一人の親御さんは外国籍なのだそうです。これは九〇年代に始まった話で、例えば小学校一クラス三十人とすると、そのうち二人の子の親御さんは外国籍の方ということになります。そういう現実を考えると、環境の変化はじわじわ、ひたひたと押し寄せているわけです。もともと日本語が母国語でない人たちがどんどん日本に入り込んできているのですから。

浜松市の北脇市長が、全国の十三市町村に呼びかけて「外国人集住都市会議」を発足させ、「浜松宣言」を出しました。国が外国人が日本に住んでいるということをきちんと受け止めて、日本語教育も含めて政策的に対応していくべきだと思います。

私は四十年前に日本語を教え始めたのですが、その時は日本語を外国語として勉強しようという人は、ほんの一握りの方でした。日本そのものに興味があって、困難にもめげず必死に日本そのものを見極めようとした方々です。私の知人に源氏物語をそらんじている人がいますし、茶道の師範の資格を取った人もいます。いわゆる第一世代の人たちは日本人以上に日本的であろうと努力した人たちです。日本語についても非常に純粋に獲得しようとした。

次に、もっと一般の方々が日本語を勉強するようになりました。日本が好きかどうかは

関係なく、ビジネスをするうえで日本語が必要だから習得する。これを第二世代と呼びます。その次が現在の状況で、生活上の必要に迫られて日本にやってきた人々で、これが第三世代です。そして、そのお子さんたちが日本の小学校に通うようになってきました。親の都合で日本に連れてこられたか、嫌も応もなく日本で生まれた子どもたちです。

日系の人たちは何十万人と日本で働いていますし、その他の外国籍の方々も地域に定住しています。そういう人たちは学校へ行って日本語を積極的に学ぼうとは思いません。自然習得です。そういう人たちが増えてきたわけです。ですから、地域で一緒に暮らしていくために、日本語ボランティアの必要性が出てきて、手を差し伸べているわけです。

**佐々木** 社会的にも地域的にも貢献したいという思いから日本語ボランティアになられる方が多いと思います。日本語教師養成講座に、いわゆる子育てが終わり子離れした主婦の方が増えているというのは、そういう側面があるのではないかと思います。実際、日本語を教える相手は多様化してきています。そういうなかで、われわれ日本語教師がどう支援していくか、非常に重要な課題だと思います。

## 日本語ってカッコイイ

**池崎** 私は二十八年前に日本語教師になったのですが、当時は、日本語の先生って何をするの、と聞き返される時代でした。日本語教師の社会的地位も確立していませんでした。日本経済の成長に伴って、日本語を勉強しなければいけない立場の人が増えてきて、私の場合はビジネスパーソンが教える相手ですから特にそうですが、この時代の日本語教育の世界は経済力が背景にありました。日本が経済大国になったから日本語を学習する人が増えてきたわけです。そしてバブルがはじけて何が変わってきたかということ、経済力にかわって、日本の文化力が背景になって日本語を勉強する人が増えてきたのです。これは、九〇年代から確実に変わってきたと思います。

ジャパン・リターン・プログラムで日本に招聘した若者は、過去五年間で、応募国は百六カ国、応募者が五百二十六人、招聘国が五十四カ国に上っています。これだけの国で日本語を勉強する人が、特に若年層で非常に増えてきている。学習者はどんどん低年齢化しているのです。

ですから、質の高い作文を書く若者が私どもの事務局にどんどん応募してきます。これまで応募は二十四、五カ国だったのですが、今年は二十歳以下のジュニアだけで三十以上の国から応募がありそうです。大学・大学院生が対象のシニアも応募者が増えています。つまり、世界各国で日本語の学習者が本当に増えているのです。

なぜそうなのかということ、日本の新しい文化への興味です。具体的には、アニメ、マンガ、ゲームソフトといった日本発の文化に世界の若者が惹かれているのです。日本のあの歌手の歌を歌いたいとか。この海外における変化は劇的です。

**西原** 国際交流基金の日本語教育機関調査は五年に一回行われていて、二〇〇三年がちょ

うど調査の年でした。その結果はまだ出ていませんので、これから申し上げる数字は五年前のものなのですが、池崎さんおっしゃるように世界における日本語学習者の伸び率で急進しているのが若年層です。

成人は横ばいか、多少減少傾向で、日本のバブルがはじけて経済的にかげりが出て、そういう意味ではむしろ中国語の方がいいというので日本語をやめて中国語をオファーする大学も増えています。

それに対して若年層は一六〇%という感じで伸びている。今回の調査結果がどうなったか、楽しみにしています。こういう急伸は、池崎さん言われたように、アニメ、マンガ、ゲームソフトといった新しい日本の文化に惹かれている面があると思います。

国際交流基金のロンドン事務所が、日本語を教科として採り入れることを考えている高校のためにビデオを作りました。その中で、実際に日本語を勉強している高校生になぜ日本語を勉強するのかについてインタビューをしています。その子どもたちの答がおもしろい。

一つは、ゲーム、アニメその他に興味があること。もう一つは、日本語を学ぶとカッコイイこと。人に自慢できるから。フランス語やドイツ語をやってもヨーロッパですから、たいしたことではない。自慢もできない。ところが、日本語ができるとなるとちょっと人に言える。知的にチャレンジングみたいな感じ。すぐれた工業製品を生み出す日本という国はどんな国か興味を持った。もっと日本という国を知りたい。日本人を知りたい。こういう答えをしているイギリスの高校生がかなりいるのです。

**池崎** 彼らにすると、日本の文化というのはすごくカッコイイんです。だから、日本語ができるのはカッコイイことになる。今度、JICAのご協力でモンゴルの日本語教師の招聘をするのですが、その選考をテレビ電話でやったのです。日本語を教えていてどんなことがおもしろいかとか、どういうときに充実感を感じるかというような質問をしたのですが、その中の一人が、モンゴルの日本センターで日本のアニメを見ながら日本語を教える講座があって、これが大変な人気だそうです。ここで子どもたちを教えていると反応がすごくいいと言っていました。

**佐々木** 日本語教育の世界も大きく変わってきていますね。経済力を背景にして、そのために日本語を勉強するという時代から、文化という国際交流の本質の部分に入ってきているというのは喜ばしいことです。

**西原** 若年層は学校教育のなかでも日本のことをよく学んでいます。例えば、オーストラリアやアメリカでは外国を学ぶためのガイドラインがあって、言葉を段階的に教えていくだけでなく、自分たちと同年代の若者はどういうことに興味を持っているかといったことも書いてあります。オーストラリアの高校生向けの教科書には、日本の高校生は朝ご飯をどのくらい食べているかという横浜市の調査結果が載っていたり、日本ではバレンタインデーのお返しがあるそうだとか、若者が興味を持ちそうなトピックで日本とオーストラリアを比較し、それが文化の比較になっている。その後ろにある人間関係、つまりお返しがあ

るといふのはどういふことなのか、そういうところまで話が行くような日本語教育になっています。

### これからの日本語教師像

**安西** 取り巻く環境の変化の中で、これからの日本語教師に望まれるものは何だとお考えですか。

**西原** 日本語能力検定試験の大前提はもちろん日本語の能力ですけれども、それだけではなくて、日本と世界はどうつながっているのかとか、学習者がどうして日本に来るのか、どうしてこの国で学習者が増えているのか、というようなことですか、日本語を学んできた心理的課程、価値観の変化といったあたりまで聞かなくてはいけないし、教えるということはどういふことなのかを知らなくてはならない。単に言葉だけを教えるのではないのですから。教師になろうとする人には、広い知識・能力・資質が求められます。そういう心構えを持っていないと、これからの日本語教師は通用しないと思います。

**池崎** 日本語を教える人に持ってほしいのはビジョンです。日本語教師としてどう生きていくか、その生き方の問題、それは人としてどう生きていくかということにつながると思います。単に知識を伝える、それだけいいのだろうか。日本語教師というものは全人格的なものを要求されますし、一人一人が自立した教師としてやっていくという視点が必要だと思います。

自分がビジネスの市場でどう評価されるかという視点も必要だし、自営業者としてしっかり自分をハンドルしていく。日本語教師として世界とつながっていること、ほかの日本語の先生たちとつながっていることも考えていってほしい。また、自分を客観的に眺める作業をしてほしい。自立した日本語教師になってもらいたいし、そのように自分を育てていってほしいと思っています。

**西原** 東京女子大学の場合、実習コースはひと月かけてミニ日本語学校を経営することになっています。あらかじめ学習者は与えられませんから、自分で探してこななければなりません。教科書も既存の教科書はいっさい使いません。休み中に実習をするので、まず学習者を集めるために広告をまくことから始まります。そのためには、どういうところに学習者がいるか、マーケットサーベイしなければなりません。

そうやって勉強しに来てくれた人たちのために自分でカリキュラム、シラバスを作ります。私たちも指導はしますが、基本的に自分たちで教材を作ります。そして、毎日感想を書かせて自己評価する。ビデオで授業を撮って反省材料にもします。日本語教師が自己診断できるベンチマークがありますので、それで当てはめて自己評価もする。そういう、自分で動かなければ何もできないという実習のコースをやっていまして、学生たちにとっては、この実習が大学生活のなかで一番大変な体験で、多くのことを学んだといってくれる学生が多いです。

**佐々木** 来年から法科大学院がスタートします。ロースクールは、単に法律の知識を学ぶだけでなく、法律の知識をいかに使いこなすかということを教えていく。また、起業家を育てようという大学の課程も生まれています。大学と企業との提携も進んでいます。このような新しい動きは、大学の社会とのつながりというものが積極的に変わろうとしていることだと思います。国立大学の法人化もそういうした動きと無関係ではないでしょう。そういうなかで日本語教育も今までとは異なって、実際に教壇に立てる人が大学で育てられてくると、バックボーンをもって日本語教育ができるようになる。そういう人が増えてくると日本語教育の質も向上してきますね。

### **学校教育に欠けているもの**

**池崎** 留学生に関して国の施策は、学校を卒業したら国に返すというのが基本です。私は、これは変えていくべきだと思います。実際に、日本で就職を強く望んでいる留学生が多くて、私どもではそういう要望に対応して留学生のための就職セミナーのような会を開いています。

彼らが一番困っているのは対語表現で、社会のなかでどういう日本語を使っていったらいいかです。ここは大学ではあまり重点を置いて教えてもらってなかった、自分たちもそれについてあまり大事だとは思っていなかったと言っています。

お金儲けのためではなくて任務を遂行するために、相手と人間関係を築いて仕事をきちりやり遂げていくために日本語教育という学習が必要ではないかと思ってうちにいらしているのだと思うのですが、彼らにとって今一番大事なのは日本の会社に採用してもらうことです。面接では、日本語で自分の意見を話せなければだめです。そこで彼らとの話のなかで出てくるのは、大学でもう少し社会と直結した日本語教育といえますか、これがこれから必要になってくるのではないかということです。

これは、外国人だけではなくて日本人にも必要だと思います。企業で面接を担当する方がおっしゃるのは、入社させてから全部教育しなければだめだと。ですから、小中高、大学ともっと社会に直結した日本語教育をやらしてもらえれば、とおっしゃっています。以前はもっと日本語力といえますか、社会のなかで使える日本語がきちんとできていたとも言われていました。社会に出る前の日本語教育のあり方が問われていると思います。

**西原** 大学での日本語教育ということですが、言語機能は三つあって、情報収集・提供機能、人間関係の構築・維持機能、精神的な高揚機能ですが、大学教育というのは情報収集・提供機能が強調されています。ビジネスの分野ではそれをベースに人間関係構築・維持機能が大切になってきます。今まで大学ではその分野はやってきませんでした。先ほど話に出た法科大学院などは人間関係構築機能も養います。

小学校の国語教育は情報収集と精神的な高揚機能は強調していますが、人間関係構築機能は入っていません。ですから、小中高大とこの機能について考えていくべきだと思います。

す。この機能は、これまで伝統的に父母、祖父母、地域が叩き込んでいたので、学校教育の範疇ではなかったと思うのですが、現在は全国に都市化が進み、家庭、地域の教育力が非常に下がっています。そういうところで自然に習得できていた人間関係構築機能を学校で行う必要性が出てきました。

留学生についていいますと、特に理科系の場合は日本語をそれほど習得しなくても英語で済む場合が多い。そうすると問題は、人間関係の構築が難しくなることです。それで日本嫌いをつくることもあります。

**佐々木** 言語教育というのは、自分の価値表現ですから、相手との関わりなしにはありえないわけです。今までの日本語教育はその部分が置き去りにされてきたような気がします。どのような教材を使ったら教えられるだろうとか、日本語を教えるための技術的なところはそれなりに進歩してきたのですが、本来、言葉の持っている本質の部分が無視されてきているのではないですか。日本の英語教育もそうだと思うのですが、その辺が無視されてきている。その意味で、TPOに合わせた言葉の使い方を教えられる先生が望まれます。若年層の日本語学習者が増えれば増えるほどそうだと思います。

**西原** と同時に、相手を知る能力が日本語教師には求められると思います。北欧の人たちに教えていたある日本語教師の方が精神に破綻をきたして退職することになったそうです。どういうことかということ、北欧の人たちの挨拶は、相手をちょっとくさすような言葉を入れるのだそうです。「こんにちは。あんただめね」というような。(笑)

それは単なる習慣なのですが、それを毎日繰り返し言われているうちに、自分は日本語教師として本当にだめなんじゃないかと思いつめてしまったそうです。そういう挨拶言葉は単なる習慣と知っていれば、それで済んだことです。それを知らなかった。学習者はどういう人なのか、どういう動機できているのかなど、その人に一番いいやり方で日本語を教えていけるような教師にならなければ。その辺は冷静に判断すべきだと思います。

### **ボランティアの社会的位置**

**安西** 大学で日本語教員養成課程を履修しながら実際に日本語教師になる人は少ないのですが、西原先生はこれについてどのようにお考えですか。

**西原** 例えば、英語教師の資格を持っている人が実際に教師になっている人がどれくらいかを考えてみますと、おそらく0・何パーセントではないかと思います。大学で日本語教育の勉強をして、卒業後ある市役所に入った人がいます。大学での勉強は、日本語教師にならなくても、そういうところでも生かされるわけです。市役所のなかで、例えば国際交流とか社会教育とか、そういうところで勉強したことは生かされる。国際交流協会に就職した人もいます。そこで大学で学んだことを生かしています。ですから、日本語教師をつくるだけが大学の日本語教育課程の使命ではないのです。

**佐々木** 大学教育は確かにそれでいいと思います。民間で行っている日本語教師の養成講

座というのは、ちょっと違って、目的意識を持った人がかなりのお金を払って授業を受けているわけです。ところが、実際にかなりのお金、かなりの時間と精力を使っておやりになったにもかかわらず、課程を修了して以後、ボランティアとしてでも日本語教育に携わっている人が少ないのが現状で、本当に残念です。

やはりそういう面では、日本語教師の社会的地位といいますか、これをもう少し何とかできないかということが一つ。それと、経済的に自立できないということが大きいと思います。これは言うべくして難しい問題かもしれないのですが、そこを日本語教育界全体の問題として捉えて、例えば政府に対する提言をするとか、そういうような必要性が出ているのではないかと思います。

**西原** そうですね。同時に、プロフェッショナル像というものを確立していかないといけないですね。

**池崎** ボランティアの話が出ましたが、皆さんボランティアというと自己犠牲というイメージで捉えています。まったく違うんです。自分がどう生かされていくか、自己実現がボランティアなのです。ボランティア活動を通じて自分が成長する。ボランティアは人のためにやっているからお金は取れないという構図になりがちなのですが、そうではないと思います。私はボランティアであってもお金を取るべきだというのが持論です。

**西原** 日本語教育界としては、これから日本語教育ボランティアをどう育てていくのか、地域のことを考えると、ボランティアのあり方をきちんと考えていくことが大切ですね。ボランティアはいいことです、ボランティアをやって下さいというのではなくて、社会全体としてボランティアのあり方を学んでいく必要がありますね。

**池崎** 私はボランティア希望の方に最初に言うんです。「大変よ」って。

**佐々木** ある大学の留学生センターに、ボランティアで教えに行ったことがあるのですが、ボランティアというのは非常に大きな責任があると思いますね。

**西原** 浜松宣言にありますように、国が、外国人が日本にいるということをきっちり認識して政策としてケアする。そこが大切だと思います。同時に、日本語教師だけではないと思いますが、対外国人対策に関わっている方たちのポジショナリズムにはきちんと対価を払う必要があると思います。職業として認めていく。

文化庁国語課で今取り組んでいる事業に、地域でコーディネータを育てる事業があります。つまり、ボランティアをマネジメントする人を育てようということです。地方自治体の中に、ちゃんとした職業としてボランティアをマネージするコーディネータが確立されるべきで、そういう人たちが養成されないといけない。一般の日本語教師でない人材としてですね。そうやって職種をたくさんに開いていくというか、日本語教育に携わる人たちが、こういうポジション、ああいうポジションを有償で得ていく。そういう展開を日本語教育界としては考えていかなければいけないのではないのでしょうか。

**池崎** そういうコーディネータ機能も日本語教師の一つの機能としてやるべきだと思います。日本語教育のことを知らなければコーディネータにはなれないのですから。日本語教

師イコールコーディネータ、コーディネータの仕事もできる日本語教師が必要になりますね。そういう力量をつけていくことがこれから日本語教師が生きていく道だと思います。

**西原** 言語ができる人ではなくて教育に関わる人なんだということが基本だと思います。そこをきちんと打ち出して行くことが大切です。小学校に行くと先生の役割がよくわかります。包容力のある先生のクラスにいる外国人児童生徒は明るくて、クラスの日本人の子どもたちの受け入れ体制もしっかりしている。一緒にやろうね、声をかけている。たった一言、一緒に遊ぼうと言うだけでいいのです。そういうことが、先生によってできるクラスと、できないクラスができてしまう。いかに教師の役割が大きいのです。

**佐々木** 学習環境の大きなポイントですね。

**西原** 教科はきっちり教えているかもしれないけれども、子どもを育てていないという先生がもしいるとすれば、問題だと思います。

**佐々木** 九月にヨーロッパの日本語教師会のシンポジウムに行ってきました。二百人ぐらい集まっていて、非常にすそ野が広がっていることを実感しました。ただ、一番すそ野が広がっていないのが日本政府なのかなということを痛感しました。

言葉というものが国の勢いに関わっていることを、真剣に政府に考えてもらいたい。子どもたち、孫たちの世代のために、日本語を国際化するというところに真剣に取り組んでいただきたいと思います。

**西原** 全く同感です。言葉を教室で教えることはとうの昔に過ぎています。そういう意味で、言語生活というものを全体としてきっちり考えていくことが必要だと思います。そのためには、ボトムアップのアピールが大切なので、日本語教師から声をあげていくことがとても必要です。

それは、おそらく職業としての教師が成り立っていくということと同時に、外国の人に日本語を教えるというのが日本語教師ですから、外の世界で見たもの、閉じられた世界ではなくて、世界を地球規模で見ってしまったものの義務の一つとして声をあげていくということをしなければいけない。国が言語コミュニケーションをどう考えていくのかについて、きっちりと声をあげていくことをしなければいけないと思います。

**池崎** 私は日本語教師の社会貢献ということで活動しているので、これからその視点で情報交換をしていきたいと考えています。日本語教師そのものが国際化していくためには、そういう連携をとっていく。政府とも、企業とも連携する。そういうなかでいろいろな知恵が出てきますので、連携は重要なことだと考えています。

少子化のなかで、外国人の人材活用は必須のことですので、そういう意味で日本語教育の必要性、重要性はいうまでもありません。ぜひ政府には、日本語政策を推進してもらいたいし、その時にはぜひ私たち民間の力を活用してほしいと考えています。

**安西** 本日はありがとうございました。